



四国防災八十八話

第十九話 大水がくるぞ

監修・著作：愛媛大学防災情報研究センター

作画：青江 美乃里（愛媛大学美術研究会）

**これは、今から約120年前の明治25年、
現在の徳島県阿南市で起こった土砂災害のお話です。**

**その年の8月の初めのある日、
何日も降り続いた大雨のため、
村を流れる那賀川からは水が溢れ、
周囲の家々を洪水となって襲いました。**

**高い所にある家でも、浸水し、
一軒一軒が孤立してしまう程の水量でした。**



ところが、翌朝になると、
あれほど流れ込んでいた水が
どんどん引いていったのです。

雨はまだ止んでいません。

“どうして、水が引いたのだろうか？”

“雨が降っているのにおかしいぞ”

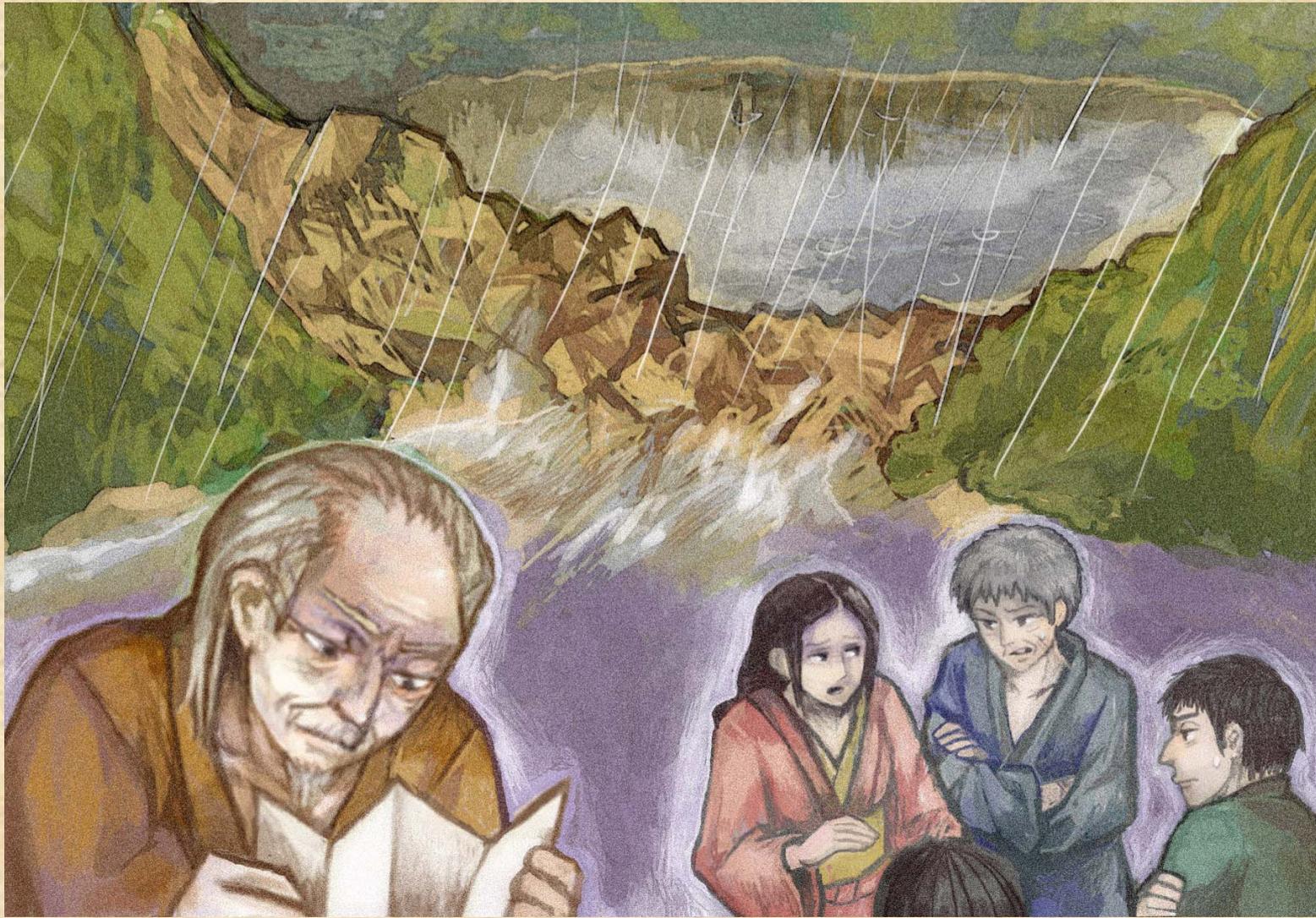
“上流で何かあったのかな？”

人々は、不安でいっぱいです。



上流の村から、
飛脚が
状況を知らせる手紙を運んで来ました。

飛脚は、
急ぎの手紙などを、
走って届ける人のことで、
電話などが無い時代には、
重要な情報伝達手段でした。



上流の村からの知らせには、

- ・ 那賀川の上流にある高磯山が崩れて、その土砂が川の流れをせき止めてしまっていること
- ・ そのため、せき止められた所より上流は湖になってしまい、家々が水没するほどの水位であること

などが、書かれていました。

水が引いた原因はわかりましたが、その土砂でできた湖がいつ決壊してしまうかわかりません。



一度決壊してしまうと、
それまで、せき止められていた水が
一気に流れ込んでくるのです。

もし、決壊したときには、
上の村から、下の村に半鐘を打って
知らせる事になっていました。

“怖いよ．．．．。
どうなってしまおうだろう”

人々は、いつ半鐘が鳴るのかわからない不安に
おびえながら数日を過ごしました。



カン カン カン カン カン カン カンッーー!!

半鐘の音が村に響き渡りました。

ついに、せき止められていた水が、溢れ出したのです。

“大水がくるぞーーーーー!”

“高台に走るんだ”

“逃げ、逃げ!”

人々は、高台に向かって死に物狂いで走りました。



高台から見下ろすと、
村は、流れ込んできた濁流に飲み込まれ、
家々は押し流され、一面泥の海と化していました。

“私たちの家が流されていく．．．．．”

“せっかく植えた稲が．．．．”

人々は、悲痛な面持ちでその光景を眺めました。



2日後、雨も止み、水も引いていきました。

“助かった”

“良かった、良かった”

人々は、ようやく一息つくことができました。

**村は、ひどい有り様でしたが、
半鐘の知らせで、素早く避難ができたお陰で、
犠牲者が出なかったことが救いでした。**